

2021 年度実施概要

糸満市立糸満小学校

1. 実施概要

学校名

糸満市立 糸満小学校

採択活動名

身近な海に親しもう

実施単元 ※実施した単元の数に応じて記載してください

単元名	学年	教科
1. クリスマスリースをつくろう	3	図工科
2. 糸満の海とプラスチックごみ	4	総合的な学習
3. 報得川の今と未来を考える	5	海人科

取り組みの概要

1 クリスマスリースをつくろう【第3学年】

- ・身近な海「北名城ビーチ」から拾ってきた貝殻とサンゴ片を使って、自分の思いに合った作品作りに取り組みました。【糸満市海洋教育副読本参照】

2 糸満の海とプラスチックごみ【第4学年】

- ・社会科の授業で学校周辺のごみ拾いをした児童たち。そのごみの中でプラスチックが一番多いことに気づきました。プラスチックごみが海に流れ出し、マイクロプラスチックに姿を変えて海の生き物に悪い影響を与えることを学習しました。海人のまち糸満の海を守り、育てるために自分たちに何ができるか深く考えることができました。【糸満市海洋教育副読本参照】

3 報得川の今と未来を考える【第5学年】

- ・学校のすぐ側を流れる報得川。十数年前に「日本一汚れている川」として認知されるようになりました。報得川の昔の様子を地域の方から話を伺ったり、実際に源流から河口域まで見学したりしました。川と海はつながっていて、川が汚れると海も汚れることを理解しました。糸満の海を豊かにし、報得川を守りきれいにするためにできることを話し合い、考えを深めることができました。



「森と川と海の学校」講演



報得川の水質と講話



報得川のごみ問題と SDG s



報得川河口の生き物さがし

2. 自己評価

(1) 妥当性

①テーマと目標設定について

- ・各学年とも、図工や社会科等と関連づけながら設定したテーマに沿って学習を進めることができた。

②学習内容の分量（無理のない計画）について

- ・コロナ禍における臨時休校や体験活動の制限があったが、各学年とも概ね学習内容を終えることができた。

③内容は各学年に適切な内容であったか

- ・教科横断的なカリキュラムを編成したことで、各教科と関連づけながら学習を進めることができた。

(2) 有効性

①内容は予定通り実施されましたか。

- ・コロナ禍でタイトなスケジュールであったが、予定していた活動はほぼ進めることができた。

②協力要請した外部機関との連絡体制や協力体制について

- ・協力依頼した団体はとても協力的で、事前打ち合わせにも親身に対応していただき、また事後学習についても助言をいただいた。
- ・野外活動については保護者の協力を得ながら安全面に気を付け、活動することができた。

(3) 効率性

①学習活動の実施時期について

- ・活動自体は天候に左右されたり、コロナ禍の影響を受けたりと何度か変更があった。

②物資・資金の規模は適切だったか。

- ・予算的には校外学習のバス代や講師派遣費、追加で海洋生物の育成キット等の購入でき、有効に運用ができた。

(4) 持続性

①学習内容や成果物が適切に活用される（見込み）がありますか。

- ・児童玄関にアクアリウムを設置し、近隣の水性生物の飼育し展示する事を通して、直に生きものに触れる機会を設けることができた。

(5) 信頼性

①担当教員は学習内容について十分知識・技能を有しているか。

- ・海洋担当の教諭が、各学年の学習内容や他教科との関連を意識して、学年担任と教材研究や外部機関との連携を図りながら学習に取り組むことができた。
- ・野外活動においては ICT 機器を活用し、オンライン配信等、欠席児童への「学びの

保障」につなげることができた。

②実施内容について外部公表・発信・共有しているか。

- ・市役所の生活環境課の協力を得て、新聞等の学習の成果物を展示。
- ・学校だよりを通して、体験活動の様子等の発信を実施。

(6) 成果と課題

①成果

- ・身近な地域の川の歴史や環境に目を向けることで、川と海とのつながりについて興味を高めることができた。
- ・身近な地域の川や海岸のマイクロプラスチック等の学習を通して、SDG'sの視点から持続可能な社会への学習の意識付けを行うことができた。

②課題

- ・コロナ禍の影響による学習活動の制限や、授業時数の削減等、予定していた学習内容の実施が厳しかった。
- ・他機関との連携や学習内容の精選、教科横断的なカリキュラムの編成等課題は多いが、少しずつ課題を解決しながら「海のまち糸満」の子ども達の育成を図っていきたい。

【その他コメント】

- ・海洋教育に取り組むことを通して、身近な川や海の生きものや環境に興味を持つことができた。
- ・海洋教育の副読本を作成することができ、今後の海洋教育の道しるべになった。
- ・海洋生物の飼育を通して、子ども達の自主性の育成や、児童玄関のアクアリウムが本校の癒やしの場になった。
- ・コロナ禍を受け実施したオンライン講演会、オンデマンド野外体験等の機材を揃えたことで、様々な活動の実施が可能になってきた。

【関係者評価】

- ・海洋教育の副読本は電子データ化し、教育委員会のホームページで閲覧できるようにすると、さらに海洋教育が発信できるのではないだろうか。
- ・川や海の汚れは、糸満市だけではなく近隣の市町村や外国等の影響もあるので、学習の範囲をもっと広げてほしいと思う。
- ・「海人工房」や「糸満ハーレー」、「水産高校」、「造船所」等の地域の教育資源をもっと活用した体験学習を実施して欲しい。